

女性が参画しやすい仕組みづくりで 災害に強い地域社会を！

防災・災害対応においてなぜ男女共同参画の視点が必要なのか、参画を推進するために求められることは。静岡大学教授の池田恵子さんに話を聞きました。

「防災・災害対応における男女共同参画の重要性とは。」

池田さん(以下、敬称省略) 被災者が尊厳を維持しながら健康や命を守って復興に向かっているためには、社会的・文化的につくられた性差「ジェンダー」を平等に考える視点がヒントになります。私たちはつい、性別や立場別で分けて考えがちですが、ジェンダーの視点の基本的な考え方は「一人一人を大切にすること」ということ。それぞれがどのような情報や支援を求めているのかを理解することで、多様な切り口で必要な支援を届けることができます。

「そもそも災害や防災対応に女性の視点が求められるのはなぜですか。」

池田 地域防災は多様な人が意見を出し合える風通しのいいものでなければなりません。それなのに防災の現場は男性が中心で、女性の声が届かない状況が生まれています。例えば、災害が起きた初動の段階では避難所のトイレが男女別に分かれていなかったり、人目を気にせず着替えるスペースがなかったり。そこに女性が参画すると、女性の声を通りやすくなるのはもちろん、多くの女性がケアを担っている子どもや障がい者、高齢者など災害弱者とよばれる人たちのニーズも伝わりやすくなり多様な視点につながります。

「地震を経験した熊本県の市町村でも、防災危機管理局の女性職員や地方防災会議の女性委員の割合がゼロのところがあります。今後女性が参画するために必要なことは。」

池田 まず市町村のトップが危機管理局への女性配置の必要性を理解し、災害時に後回しになりがちな職員の支援体制を整えておくことが大切です。例えば、①市役所や町役場の中に男女別の仮眠施設を作る②職員向けの託児の確保③心のケア対策の準備をするなどが求められるでしょう。それでも難しい場合は、庁内の各部署から女性のチームを作り備蓄物資の確認をしたり、避難所の体制を平常時に検討したり、方針決定の場にいるいろいろな形で女性が参画できる仕組み作りを行うことです。さらに、行政担当者だけでなく、地域住民一人一人が災害時に迅速に対応できるよう、女性防災リーダーの役割や連絡先などをあらかじめ明確にしておくことが大切です。また、平時から被災者の多様なニーズを把握し準備しておくことで、災害に強い社会が築かれると思います。

話を聞いたのは



静岡大学
グローバル共創科学部
教授 池田恵子さん

Profile/災害と社会・暮らしの関係や、ジェンダー・多様性の視点による防災と災害対応について研究している。

男女共同参画 in パレア マインドアップセミナー①

「性と生 自分らしく生きるための 心の在り方と周囲のサポート」

6月23日(日)、臨床心理士・公認心理師の、みたらし加奈さんを講師に迎え、『性と生 自分らしく生きるための心の在り方と周囲のサポート』と題してセミナーを開催しました。約50人がオンラインで参加。性差別や性被害の課題や問題点、周囲のサポートについて学びました。

自分の快・不快を見極め、心地悪いことにふたをしないで

「LGBTQ+やジェンダーの話は、指向ではなく生きることと密接につながっている。自分らしく生きることを考える上で、健康、アイデンティティに加えて社会構造も知ることが第一歩」と前置きした、みたらし加奈さん。前半では、「セクシュアリティと生き方」をテーマに、「性的指向や性自認に関して法整備されていないため、地域社会で差別を受けたり、

男女共同参画 in パレア ロビー展



パレア9Fロビー(右)長洲町役場庁舎1Fロビー(左上)県立小川工業高校(左下)で実施

パレアほか、県内18カ所で
同時開催！

毎年6月23日～29日は男女共同参画週間。今年のテーマは、「だれもがどれも選べる社会に」。今年はパレアほか、県内16の自治体と二つの高校が参加し、男女共同参画に関する啓発やクイズのパネル展などを実施しました。

パネル展実施市町：八代市、宇城市、山都町、菊池市、玉名市、長洲町、合志市、上天草市、益城町、御船町、宇土市、南関町、荒尾市、天草市、山鹿市、大津町、実施校：県立小川工業高等学校、県立菊池高等学校(順不同)

cover coordination
今回の表紙に登場したのは



創のスタッフと保護者のみなさん
(上段中央は主宰者の坂口京子さん)

人と社会をつなぐ
第三の居場所
サイドプレイスBird

熊本市新屋敷にある3rd place Bird(代表:坂口京子さん)。毎月第2日曜の「お絵描きカフェ 創」では、支援学校を卒業したメンバーが自慢のハンドドリップコーヒーを提供し、自閉症の中学生が本格的なマジックショーを披露。誰もが気軽に参加でき、子どもたちを見守る地域や保護者同士の交流の場になっています。また10代の居場所(ユースセンタートリノスミカ)も開設。家でも学校でもない第3の居場所として、多様な生き方の可能性を探ります。

女性のエンパワーメントで高める地域の防災力 くまもと女性防災リーダー育成プロジェクト Rin

「くまもと女性防災リーダー育成プロジェクトRin」は、災害時に不可欠な女性の視点を今後の防災政策やまちづくりに生かしていくため、地域や職場、学校などで啓発活動を行う女性防災リーダーを育成するプロジェクト。国の休眠預金活用事業(R5～7年)を県内の企業(有)ミューズプランニングが受託し取り組みました。

1期2期それぞれ6カ月におよぶ講座には、地域防災やまちづくりに関わっている県内在住の女性およそ60人が参加。防災・減災における多様な視点の重要性を学んだり、東北視察を行ったり、防災リーダーとして必要とされる専門知識やスキルの習得に向けての学びを深めました。

事業終了後は女性防災リーダーのネットワークを構築し、

引き続きSNSを活用した情報共有や、学習会、地域での実践活動などを行いながら有事への備えも進めていくとのこと。またメンバーの中から、地域の防災会議や各種審議会委員への参画も促していく予定だそうです。



震災ミュージアムKIOKU1周年記念イベントでの防災ワークショップの様子